

学 位 論 文 要 旨

氏 名 妹尾 佑介

題 目 美術の表現主題生成に影響する環境因子の研究

本論は、高校生の芸術科美術の授業における生徒と環境との相互作用に着目し、表現主題生成に影響を与える環境因子を明らかにすることで、表現主題生成と創造的な学びの関係を考察し、主体的な学びを促す環境構成について考察することを目的とする。

美術の授業において生徒は、多様な外界の影響を受けながら表現する。その過程で、生徒は、自分にとっての、あるいは生徒たちにとっての世界の意味を生成する。この意味生成の過程は、環境や、過去の経験を総合し、世界と新しい関係を構築する過程とも捉えられよう。その際に生徒に生じる表現しようとする意を、広く本論では表現主題と捉え、その生成の仕組みの一端を明らかにすることを目的に研究を進めた。

第1章では、先行研究を調査し、次の3つを検討した。

- ①先行研究を調査し、本論における表現主題の射程の検討と課題の明確化
- ②表現を通じた学びに関する歴史の変遷および今日的教育課題の調査、検討
- ③表現主題生成と創造的な学びとの関係についての検討

これらの検討と川喜田二郎、岡田猛らの創造性理論を基に、自ら新たな課題を設定し、その課題の達成を目指そうとする創造性を育む学習構造図である「フロントランナー型創造性モデル」（以下：「F型創造性モデル」）を構築した。

F型創造性モデルは、渾沌からの「関心」「出会い」を経て「知覚・習得・表現」の循環を行い、その過程で「省察」が起き、「発見」することで「新たな意味付け」を行い、その意味付けを他者と共有することで「価値」となり、自分の価値観が変容する「脱皮変容」の状態に至る過程を示したものである。このF型創造性モデルを循環させようとする心の動きと、表現主題生成の関係が明らかになれば、表現主題生成の構造をより柔軟に捉え、その仕組みの一端を明らかにできる。

そこで、第2章から第5章では、後期中等教育段階における生徒が、美術の授業において表現主題を生成したり、変化させたりする過程を分析した。

その結果、実際の生徒が制作する過程における多くの場面では、題材が提示された後においても、表現主題は生成され続け、変化し続けることが明らかになった。そして、教師が提示した題材への応答以外の文脈においても、表現主題生成が起きていることが確認された。

第2章では、感受が表現主題生成に与える影響を調査し、3つの傾向を明らかにした。

- ①感受が多様な生徒は、色彩などの表現が多様になる傾向
- ②自己が価値づけているものからの感受が、生徒にとっての新たな表現を触発する傾向
- ③感受の違いを実感する経験を重ねることで、自己と他者の違いを受容する態度が表れやすくなる傾向

第3章では表現主題の変化に着目して調査を行った。その結果、表現主題は表現過程で変化する、その際に視覚に関連する語や擬態語が多く出現する傾向にあることが明らかになった。加えて、次の3つの因子が、表現主題の変化に影響すると考えられると論じた。

- ①触れながら表現主題に適した材料を選択する相互行為
- ②友達や教師の共感的な関わりの中で、他者に表現主題を説明する相互行為
- ③他者から過去に評価された技法や材料を再活用する相互行為

第4章では、他者の表現活動が個人の表現主題生成に与える影響について調査した。調査の結果、他者と意見が相違する状況など、生徒にとって困難な状況が生じた場合、自ら表現主題を変更する対応をしたり、表現主題を社会的価値や教師の指示など、外界のものに委ねたりする対応が見られた。一方、造形を介して違いを受け入れようとする雰囲気のあるグループは、意見の違いを基に、自らが想定していなかった新しい価値へと向かう姿が見られた。これらの事象をF型創造性モデルの視座から分析し、考察した。

第5章では、自分の作品に対する他者の価値付けが、創造活動に与える影響について調査した。その結果、次の3つの傾向が明らかになった。

- ①他者の感じ方を知り、自己の作品を意味付ける過程で、他者から影響を受けている実感が高まる傾向
- ②意味付けを新たに創造しようとする学習態度と、意味付けを他者に伝えようとする学習態度が存在し、学習環境に応じて度合いが変化する傾向
- ③意味付けの検討を重ねている生徒は、他者の言葉によって意味付けが拡張しやすい傾向

第6章では、第2章から第5章までの成果を基から、F型創造性モデルが、表現主題生成の多様な起点を内包した創造性モデルであることを指摘した。そして、各章の成果とF型創造性モデルを総合して、表現主題生成の仕組みとして、次の3点を指摘し、その構造について論じた。

- ①身体が「知覚・習得・表現」の循環に作用し、「省察」、「発見」を促す表現主題生成の仕組み
- ②生徒が他者との関わり合いの中で「省察」が起き、新たな「発見」に至る表現主題生成の仕組み
- ③表現を終えた後に、作品や自分の表現行為の痕跡を見て「省察」、「発見」、「新たな意味付け」が生じ、新たな表現や自己理解の深化に至る表現主題生成の仕組み

そして、本論の成果が、生徒が学びに向かう多様な学習場面の分析や、生徒の自己省察ツールとしての応用などに展開し、発展していく可能性と展望について述べた。